

知識と生きもの感覚の統合



JT生命誌研究館

副館長 中村 桂子

京

都に世界各国から人々が集まって決めた地球温暖化に対応する具体的対処

への第一歩が、アメリカが後ろを向いてしまったために、さあどうしようとなっている（この原稿COP6の会議より前に書いていますので。雑誌が出る頃には各国の動きがわかっているはずですが、ここで書きたいことは、基本的態度の問題です）。

では、アメリカは環境問題に無関心なのかというところではありません。地球温暖化に関する研究では、最高水準にあります。だからこそ、すぐに二酸化炭素の量的規制には応じられないという面もあるのです。二酸化炭素と温暖化との因果関係に始まり、温暖化の実態などを「科学的」に調べれば調べるほど、スパッとした答えは出てこなくなりまして。

それが自然というものです。実は、科学という学問は、自然の中から原理原則を探り出し、それで説明できる現象を研究してきました。その結

果、天体のような大きな世界から、私たちの体を作る細胞の中で働くDNAのような小さなもので、たくさんのものが見つかり、その働き方もわかってきました。科学はすばらしい。確かにそうです。でもここで間違っているはいけません。すばらしいけれど、それでわからないこともたくさんあるということです。

環境についても、科学でわかることはたくさんあります。でも、おそらくわからないことの方が多い……ではどうするか。心配はいりません。私たち人間は自然の一部である生きものなのですから。生きものとして身につけている感覚を使えば自然の本質を肌で感じることができます。危険も察知できます。

科学的知識は重視しなければなりません。でもそれだけに頼ってはいけません。生きものとしての感覚も研ぎすまし、両方を統合し行動を決めることが大事なのです。二十一世紀は、知識と生きものとしての知恵とを統合した知の時代になりたいものです。



筆者Profile

昭和11年生まれ（東京都出身）／昭和39年東京大学大学院生物化学修了（理学博士）
国立予防衛生研究所、三菱化成生命科学研究所社会生命科学研究室長、早稲田大学人間科学部教授、東京大学先端科学技術研究センター客員教授、大阪大学連携大学院教授を経て現在に至る。

【著書他】映画「On the Way」（監督・催在銀）の脚本担当、「ゲノムを支配するものは誰か」監修（日本経済新聞社）、「ゲノムを読む」（紀伊國屋書店）、「DNAとの対話」（早川書房）他著書多数